

夜風がノアの前髪を揺らす。お祭りの喧騒が聞こえる。通りを駆けていく、楽しそうな数人の子ども。女の子のひとりが足をもつれさせ、べしゃ、と転んだ。

すぐに起き上がったが、女の子はわんわん泣き出してしまった。通りがかった男女が、女の子の頭を撫で、持っていた蜂蜜のキャンディをあげた。女の子はパアッと笑顔になり、再び子どもたちの輪に入り、駆けていった。

私は、あの女の子と同じ。

何もできなくて、もらってばかり……。

「どうしたの？」

ジッとするノアの傍らに、リアムがやって来た。

「今日、ずっと無理してる」

「え？」

ノアは、ゆっくりとリアムを見た。

朝、馬車に乗り込む時のネックも、昼間の市場でのノランもそうだった。

何も言っていないのに、どうしてこの人たちは、私の気持ちをわかってくれるんだろう。

「……記憶が戻らないことに、不安がないわけじゃないの」

気づけば、ノアは自然に口を開いていた。

「でも、私……みんなに、何もできない。差し出せるものもない」

ぽつり、ぽつりと零れるノアの言葉に、リアムは静かに耳を傾ける。

「そんな私が、みんなに、こんなにしてもらっていいのかな、って……」

ここまで言って、ノアはうつむき、口を閉ざした。

「気にしなくていいんだよ。困っている時はお互い様なんだから」

「でも……」

リアムがノアの肩に優しく手を置いた。

ノアはわずかに顔を上げる。

「そんなこと言ったら、私だって二人に助けてもらってばかりだよ」

「え？」

「私さ、家族いないんだ。他に頼れる人もいなくて……。でもネックやノランは何も言わずに側にいてくれた。たくさん助けてくれた」

ノアは、リアムの横顔を見た。

リアムは、バルコニーの棧に肘をつくと楽しそうな顔をして、眼下の通りを眺めた。

「二人ともあんなだからさ、なんにも考えないで自由気ままに生きてるみたいに見えるけど、戦争で家族を亡くしたりすごく苦労してる――。だから困ってる人に寄り添えるんじゃないかな」

市場の方から、酔客の上げる大きな笑い声が聞こえる。

「私もノアと同じこと思ったことあるんだ。ネックもノランも魔法で何でもできちゃうのに、私にはできないことがない。でも役に立ちたいって。だから、お裁縫とか創作を一生懸命覚えてさ……。二人が喜んでくれてるのは分からないけどね」

「そんなことない!! だってリアムは優しいもん」

必死で首を振るノアに、リアムは優しく微笑んだ。

「ありがとう……。私たちは、何かを返してほしいわけじゃない。でも、ノアが『何かを返したい』って思ってくれるなら、それはすぐじゃなくていいんだよ」

「リアム……」

「一番大変なのはノアだもん。今のうちにいっぱい甘えちゃえばいいんだよ」

「そうだそうだ」

その声にふたりは驚き、振り返る。